

「日先」神社と摩利支天の伝承

佐藤 智敬

目次

- 一 はじめに
- 二 関東地方における「日先」神社の伝承と現在
 - (一) 各地に残る「日先」神社
 - (二) 茨城県土浦市右粉の日先神社
 - (三) 茨城県大洗町神山の日先神社
 - (四) 東京都江東区猿江の日先神社
 - (五) 「日先」神社の特徴
- 三 摩利支天と「日先」
 - (一) 仏典による摩利支天解釈
 - (二) 近世神道者の摩利支天解釈
 - (三) 法華宗と摩利支天解釈
- 四 おわりに

一 はじめに

小稿では、「日先」という社名を持つ神社を分析し、それにまつわる、各地における伝承の差異や変遷、仏典の影響があると思われる思想的背景の考察をとおして、民俗資料としての神社の伝承のとらえ方を考えた。い。

筆者は以前、茨城県土浦市右粉に鎮座する日先神社の由緒内容の変化から、神社の位置する右粉と、神社にまつわる歴史認識を探ろうと試みた¹⁾。この神社は創建からそれ以降の歴史を由緒内で説いており、その中で何故日先神社と称するかについて、「鎮座地が日

先峯であることにちなむため」としていた。そして茨城県下にくいつか分布し、日光東照宮などと関連する「日光」神社とは異なる神社で、社名は鎮座地右舂特有の小字名を採用したものと解釈できた。

しかしその後調査をすすめていくと、地名とは無関係に、まったく同じ「日先」を社名とする神社がいくつか存在を知った。そしてその神社は例外なく近世から近代初期にかけて、仏神の摩利支天を祀っていた。現在でも「マリシテンサマ」と通称される場合もある。この事から当初単なる地名と思われた「日先」は摩利支天と何かしら関連する言葉であり、その意味が現在では失われ、伝承が独自の発展をしていることが伺われた。

この経験をふまえ、小稿では茨城県・東京都に残る、摩利支天と関連し、「日先」の語を使用している神社を事例としてとりあげ、それらにいかなる伝承があり、いかなる変遷を経ているのかを考察する。

さらに、近世から近代にかけて神道や仏教の間に流布していたと思われる摩利支天に対する解釈から、「日先」神社に近世、近代の神道者や僧侶等による摩

利支天解釈の影響があった可能性を指摘し、さらに各地の「日先」神社との関係をもみていきたい。

また民俗学における摩利支天信仰研究は、長沢利明による近世から現代にいたる江戸東京の摩利支天の考察があるが²⁾、神道祭祀の摩利支天信仰についての考察はなされていない。小稿では江戸東京にとどまらない摩利支天信仰の変遷をも視野に入れ、考察したい。

二 関東地方における「日先」神社の伝承と現在

(一) 各地に残る「日先」神社

ここでは茨城県および東京都に鎮座する、近世、近代以降に成立し、摩利支天から変化したと思われる、社名の由来、信仰形態の差異などの比較をとおして、伝承の地方差をみていきたい。

「日先」を社名とする神社は、かつて仏神である摩利支天を祀っていたが、神仏分離などにより祭神を変えたとともに、「日先」の社号を付与したものと考え

られる。その数は多くはなく、旧社格も高くないものばかりである。現段階で筆者の把握しているものは、①茨城県土浦市右粉、②茨城県東茨城郡大洗町神山、③東京都江東区猿江にそれぞれ鎮座している。いずれも日先神社（読みはそれぞれ異なる）という社名を持ち、かつては摩利支天と関連していたことが伺えるものばかりである。しかし現社名の由来や信仰の形態に明確な統一性は認めにくい。

以下、文献および現地調査をもとに、各「日先」神社の伝承と現在、そして摩利支天との関係を詳述する。その際の記述順は筆者の調査順であり、それぞれの神社間に序列があるわけではない。

(二) 茨城県土浦市右粉の日先神社

茨城県土浦市右粉の日先（ヒノサキ）神社（旧村社。現祭神・武甕槌命、経津主命、衝立船戸大神）はJR荒川沖駅に近い丘（旧小字・日先峯）の上に鎮座している。（写真1参照）戦時中は戦勝祈願、生還祈願などに功があるとされた神社である。現在、境内の碑文や神社誌などには創建の由来を源頼義・義家父子に求

めている。

近世後期作成と思われる「右粉村絵図」には「摩利支天権現」と見え、その周辺は摩利山新田と呼ばれ、その地名は現在にも残る。（写真2参照）この日先神社は、社名の「日先」の由来を、鎮座地が「日先峯」であるため、としている。

判明している中でもっとも古い時期に記された由緒は明治十五年

（一八八二）

に記された、岩手県陸前高田市に残る掛軸である。当地では、同年十月に右粉日先神社に参拝した際、神札と掛軸を受け、それを日先神社の勧請に見

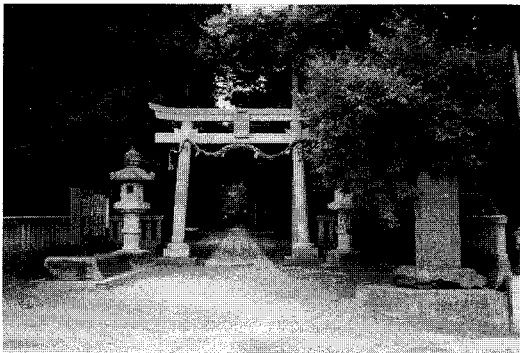


写真1 右粉日先神社
平成11年筆者撮影

立て、氏
子持回り
で礼拝し
ていると
いう。右
粉には伝
存してい
ないその
掛軸には、
以下のよ
うに記さ
れている。



写真2 国文学研究資料館史料館蔵「右粉村絵図」
(慶応元年頃 常陸土浦土屋家文書1162)
平成12年筆者撮影

当社ハ常陸國信太郡右粉村日先峯ニ鎮座ス因テ日先
神社ト号ス本朝武勇ノ祖神ニシテ正殿ハ建御雷之男
大神左方ハ布都大神右方ハ布那斗大神ナリ抑此主三
柱大神ハ上古天孫降臨ノ際ニ在テ天照大御神ノ勅ヲ
受患神ヲ驅除シ下國ヲ平定シ以テ太平ノ道ヲ開キ今
ニ至テ國家ノ鎮護タリ天下ノ人貴トナク賤トナク祖
ニ受ケ孫ニ胎シ以テ生靈ヲ保護シ以テ家門ヲ長久ニ

富榮ナラシムル者一トシテ大神等ノ恩威ニ頼ラサル
ハナシ敬セサル可ンヤ尊マサル可ンヤ³⁾

文面では創建の由来は語られず、右粉村の日先峯に鎮座するがゆえに日先神社と社名がついたとし、祭神の神威と利益を讃えている⁴⁾。

近代以降、幾度も神社の由緒は解釈、再記述され続けてきた⁵⁾。右粉の日先神社の由緒には当初、摩利支天は名前すら記されず、大正期以降「以前は摩利支天を祀っていた」と主張するようになり、さらに昭和九年（一九三四）刊、『東村誌』の日先神社由緒の記載以降、源頼義・義家による創建の歴史を記すようになる⁶⁾。その後もこの神社は、郷土誌や市史民俗編などに由緒が記されるたびにその内容が変化し、現在では日先神社と改称する前年には鎮座地「日光峰」にちなんだ「日光神社」であったことになっている。『土浦市史 民俗編』に載る日先神社の由緒は以下のようなものである。

祭神は武甕槌命、経津主命、衝立船戸大神、右粉

に一社だけまつられているが、市域内では有名な神社の一つ。むかし中家郷信太庄の鎮守として崇敬されていたという。はじめ丸四天権現といひ何時しか摩利支天権現または摩利支天神社といわれた。明治四年五月に日光神社、同五年十月に日先神社と改称した。社伝によれば、天喜五年（一〇五七）十二月、源頼義、義家父子が奥州阿倍貞任征伐のため軍勢を引きつれて当地に到着、頼義は西峰山高野寺に宿営、義家は志太長者宅を陣所としたという。その夜靈夢があり、義家の枕頭に神が現れて「我汝を待つこと久し、今汝に力を添へん、必ず賊を平らげ名を天下に輝かさん」という御告をしたという。義家は不思議に思い、夜の明けるのを待つて、父の前に出て、この由を告げると頼義も同じ夢を見たという。父子は不思議に思い高野寺の長者を尋ねたが判らず、鹿島の宮仕宮本権太夫を呼んで尋ねたところ、「それこそ鹿島、香取、息栖の三神なり」というのですぐに三神をまつり祈誓しようと、とりあえず日光の峯の御祖神の傍に丸太四本を並べ、四方に青竹注連をばり、賊徒平定の大祈願祭を厳修したという。康平

元年（一〇五八）十一月ここに社殿を創建し、丸四天権現宮を尊称し、三神をまつったという。同六年、征奥の大任を果たした源頼、義家父子は、当社に甲冑、劍、弓等を奉納、翌七年から軍陣祭が行われ、当社から石経塚に神輿が渡御するとき、供奉者は各甲冑をつけ盛儀をきわめたと伝えられている。

この記述にも、「日先」と摩利支天の関連はまったくなく、創建に携わった源頼義・義家が丸太を四本並べて祈願した故事から、丸四天権現↓摩利支天権現↓日光神社↓日先神社と名称を変更してきたことを説く。昭和十五年（一九四〇）の土浦市に編入後、小字を表記することの少ない現在、鎮座地を日先峯と呼ぶ者もなく、しばしば「日光」と記される事もあり、当初は日光神社と改称したと記す由緒がいっそう「日先」の社名の認識を弱めているように思われる。

また戦前までは、摩利支天像が伝存していたらしいが、現在は失われている。現宮司が子供の頃、猪に乗った摩利支天像を描いた掛軸を見たことを記憶しているのみである。ただし現存の境内に奉納されている絵馬、



写真3 猪に乗った摩利支天給馬
平成11年 筆者撮影

扁額の中で、猪に乗った三面六臂の摩利支天像を描いたものを二点認めることができる(写真3参照)。
しかし九〇点以上残るそれら奉納絵馬のなかで、猪に乗る摩利支天画像はこの二点のみである。そのほかの多くの摩利支天(祭神)は双体の天狗像として描かれている(写真4参照)。

近代以降、霞ヶ浦航空隊の近隣という立地もあり、疫病除けの神、戦勝祈願、生還成就の神として機能し、広く参拝者を集めた。戦後は神職の一時的断絶などから、それらの信仰も弱まり、由緒に記されている軍陣

祭も行われておらず、現在は右柳の一鎮守である。

(三) 茨城県

大洗町神山の日先神社

茨城県東茨

城郡大洗町神

山の日先(ヒ

サキ) 神社

(旧無格社。

現祭神・天照大神)は水戸藩支藩の守山藩士が明治初期に摩利支天を祀ったことに始まる、とする。藩祖松平頼貞を顕彰し、守山藩の歴史の文脈で由来が語られている。守山藩の旧陣屋跡とされる場所にあり、近在の稲荷神社の宮司が管理している。この稲荷神社の由緒にも

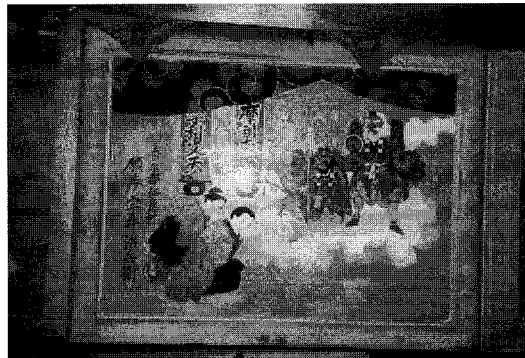


写真4 双体の天狗として描かれる摩利支天給馬
平成11年 筆者撮影

傳云守山藩主源頼貞封を常奥二州に受くるや當地を
選定して陣屋を設け、此神を勧請して陣屋の守護神
と為す。累代崇敬し一藩の鎮守と崇め今日に至る。
昭和六年二月明細帳に編入¹⁾。

とあり、やはり守山藩との歴史的関連を主張している。
昭和四十八年(一九七三)に編纂された『茨城県神
社誌』には摩利支天と神社の關係はまったく見られず、
以下のように記している。

明治元年当時守山藩士一同が奉祭した。当藩は水戸
の親藩にして勤王の志厚、維新の国情に鑑み神社を
奉祭し、一藩の報国の思想を強固ならしめた。昭和
二七年十月二四日宗教法人設立²⁾。

しかし、『大洗町史』を見れば、少なくとも近代に、
大洗町神山に摩利支天が祀られていた事は自明のこと
である。通称もまた「まりしてん」であった³⁾。由来
については、昭和四十八年版の『茨城県神社誌』の主
張する創建年代とは大きく異なり、以下のように記さ

れている。

摩利支天(日先神社)

摩利支天とは障難を除き利益を施するとされ、日本
では古くから武士の守り本尊として信奉されてきた。
旧陣屋内にあるこの摩利支天堂は、初め守山藩主頼
貞の靈所として創建された。以後藩主の厚く信仰す
るところであった⁴⁾。

神山の日先神社は、昭和十五年(一九四〇)に編纂さ
れた『茨城県神社誌』には記載されていない。管理者
が共通の稲荷神社が昭和六年(一九三一)に神社明細
帳に記載とあるので、日先神社はそれ以降、昭和二十
七年(一九五二)に宗教法人化した際に神社として登
録されたものと思われる。神社として登録する際、日
先神社と改称させたのは現宮司(大正十五年生まれ)
の義父にあたる人物(明治五年生まれ)で「摩利支天
は日の先に立つ神である」との解釈から「日先神社」
と改称したとする。そして祭神はもともと偉い神を祭
神にすれば間違いない、ということと天照大神とした
のだという(平成十三年、筆者による聞き取り)。



写真5 空き家に残る摩利支天像
平成13年筆者撮影

神体は守山藩主であった松平頼貞の名を記した位牌であるという。それと共に厨子に入った摩利支天像が二体と、その他仏像が社殿に納めてあったという。一体は盗難に遭ったといい、現在は猪に乗った摩利支天像一体が残る(写真5参照)。しかし、現在台風によって社殿が倒壊してしまっている。神体とされる藩主の位牌は稲荷神社の社殿内に納められることになり、それ以外の摩利支天像、仏像、奉納額などは倒壊した社殿の至近距離に建つ空き家に仮置きされている¹⁾。

また、現在神山の日先神社は、祭祀者以外には存在

自体が周辺にあまり認識されていない。筆者は神山のある農家で「日先神社(摩利支天)」がどこにあるか聞いてみたが、知るものがなく、『茨城県神社誌』に載る住所をたよりにようやくたどり着いた。平成十三年現在、立派な作りの稲荷神社にくらべ、鳥居や石塔などはなく、道祖神と灯籠が残るのみで、社殿が倒壊した現在、どこに神社が建っていたのかさえ不明瞭である。そして、氏子の主体とされる旧守山藩士の子孫の家自体、神山では現宮司家のみという状況であり、かつて九月に行われていたという祭礼行事、講集団などが現存するわけもない状況にある²⁾。

(四) 東京都江東区猿江の日先神社

東京都江東区猿江の日先(ヒノサキ)神社(旧無格社。現祭神・猿田彦大神)は、正徳年間(一七一〇—一七一六)または延享年間(一七四四—一七四八)、修験による船橋大神宮末社の勧請と伝える³⁾。右耜、神山の日先神社と異なり、丘の上ではなく、寺町として有名であった本所、深川といわれる地域に鎮座する。

この神社は近世後期から江戸では名が知られていた

ようである、今回筆者が見出した史料のなかで「日先」神社としてはもともと古い時期まで遡ることができる。

現存するものでは、文政四年（一八〇七）、三島政行による、『新編武蔵國風土記稿』編纂の材料になったといわれる地誌『葛西志』がある。そこには、以下の様に記されている。

摩利支天社 年貢地凡百坪余 重願寺の北の方、小路を隔ててむかひにあり。神主は白川家の配下、吉田兵庫と云、社傳に當社はもと下総國船橋大神宮の末社にして、かの地にありしか、延享の頃此処へ遷座せりと、本社六尺四方、拜殿三間に二間、向拜九尺四方、本社 of 東に舞殿あり。又西の方に稲荷の小祠あり、社地の入り口には木鳥居一基を建^ス

ここではもともと船橋大神宮（千葉県）の末社だった摩利支天祠を、神道者と思われる吉田兵庫が祀り直している姿を伝える。

天保五年（一八三四）頃、斉藤月岑、長谷川雪旦那らによつて編纂された江戸周辺のガイドブックとも言え

る『江戸名所図会』には「猿江摩利支天祠」として挿絵が紹介されている（挿絵 1 参照）。『江戸名所図会』は社寺や名所の挿絵とその説明文で構成された膨大な書であるが、猿江摩利支天祠については「来由は拾遺江戸名所図会によつて見るべし」とのみあり、詳細な由緒や信仰内容までは説明されていない。

同じ社について、同じく斉藤月岑が天保九年（一八三八）、江戸周辺の年中行事を記した『東都歳時記』には「日先社」として記されている。そして以下の様にさまざまな行事を持っていたことがわかる。



挿絵 1 「猿江摩利支天祠」（『江戸名所図会』）⁽⁹⁾ 猪の姿の狛犬を配し、社殿前で礼拝する人が描かれている。

亥の日（毎日） 摩利支天參 上野徳大寺 毎月開帳、正月初亥には千卷陀羅尼修行あり、そのほか開帳講中あり、深川猿江日先社 亥の年には開帳あり、雜司ヶ谷玄浄院摩利支天開帳 正五九月には十卷陀羅尼修行²⁰⁾

三月十三日 深川猿江摩利支天太々神樂興行²¹⁾

六月廿三日 深川猿江 摩利支天疫神除祭、名越修行²²⁾

十月上亥の日 摩利支天參 上野徳大寺（上中下の亥の日ともに參詣多し）猿江日先社祭礼（二十五座神樂、湯花興行）²³⁾

ここでは、当時の江戸における摩利支天の祭礼のうち、江戸周辺における代表例として猿江の摩利支天の祭礼を挙げている。これにより、少なくとも『東都歳時記』の刊行時期に猿江の摩利支天社は「摩利支尊天日先社」

であり、すでに摩利支天を象徴する言葉として「日先」の名称を使用していたことがわかるのである。

なお、齊藤月岑が『江戸名所図会』で予告した『拾遺江戸名所図会』（『江戸名所図会拾遺』）については、『東都歳時記』の巻末の宣伝に、全五巻で刊行予定と広告がついている。しかし現在にいたるまで公刊されたことはない。ゆえに天保期の猿江摩利支天祠（日先社）について詳細な内容は不明である。

嘉永四年（一八〇七）の正月三日、四月十四日にかけて、猿江摩利支天の開帳が大々的に行われた。その記録は江戸幕府の開帳記録にも見られる。齊藤月岑はそのことを著書『武江年表』に同年の特筆すべき出来事として載録している²⁴⁾。この開帳には齊藤自身が出向いたようで、自身の日記（通称『齊藤月岑日記』）にも

嘉永四年辛亥四月二 昼後直ニ猿江摩利支天尊開帳へ参る²⁵⁾。

と、記している。江戸時代、さまざまな寺社が開帳を

行っているが、記録に残る限り、猿江摩利支天の、幕府管轄のもとで公的に行われた開帳はこの嘉永四年のみである²⁵⁾。しかし『東都歳時記』に多くの行事が載っているので小規模の開帳はしばしば行われていたであろう。

明治十七年（一八八四）編纂の『東京名勝圖會』付録の「名勝古蹟」には「摩利支天 猿江町ニ在リ」²⁶⁾とあり、明治二十三年（一八九〇）編纂の『東京地理沿革誌』には「神社あり日先神社と云」²⁷⁾とあるように、明治以降も、日先神社とも、摩利支天とも通称されてきたようである。現在でも鳥居に「摩利支尊天 日ノ先神社」と記すように、摩利支天信仰を完全に失うことはなかった。亥の日は摩利支天の縁日であり賑わっていた。「日先」と称されると同時に摩利支天祠という通り名が現在でも通用する。

昭和六十一年（一九八六）刊行の『東京都神社名鑑』では、近世に「日先」の社号があったことは指摘されず、明治の神仏分離以降の改称とし、以下のように記している。

摩利支天とは元来仏教神で、太陽の前に先立ち進むといわれるところから、明治以後、社号を日先とし、仏教神を改め猿田彦大神を御祭神とした。その創立は正徳年中ころと伝えられ、猿江の摩利支天祠として『江戸名所図会』の挿絵にもなるほどの賑わいをみたという。その後、社殿は明治十五年に再建されたが、昭和二〇年の空襲により消失し、昭和二十八年に再建された²⁸⁾。

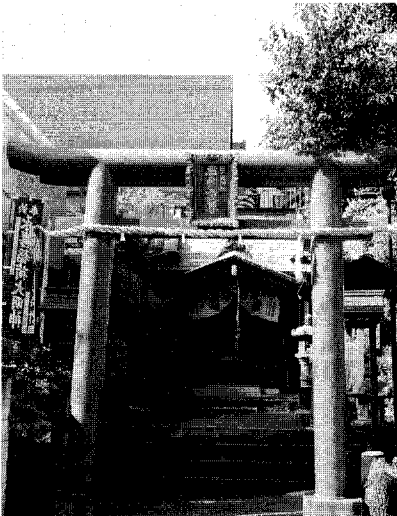


写真6 現在の猿江日先神社
平成13年筆者撮影

明治から大正期には別の日先神社信仰があった可能

性もある。大正十五年（一九二六）編纂の『深川區史』によれば、「摩利支天由来記」、「先日神社由来記」といった、いくつかの由緒が存在した。しかし関東大震災で焼失し、現在その内容は不明である²⁰。神社は昭和初期には毎月三日、十八日、二十七日の三回縁日があり、多数の夜店が出て大変な賑いだつたという。この時点で『東都歳時記』に記される祭礼期日とはもはや異なっている。現在十一月二十七日を祭礼日としているが、これは三回目の縁日にあわせたものである。戦災焼失、再建を経て、永喜稲荷神社と合祀され維持会によって管理されている（写真6参照）²¹。

（五）「日先」神社の特徴

これまで判明した「日先」神社について、その特徴を整理しておこう（図1もあわせて参照）。三つの「日先」神社中、摩利支天像を現在も所蔵するのは神山の日先神社のみである。右叡の日先神社には戦前に猪に乗った摩利支天掛軸があつた、とするが現存しない。ただし奉納額にその姿が残る。猿江の日先神社は関東大震災、戦災などにより焼失、再建を繰り返して

いるので画も像も現存しない。しかし周辺地域で日先神社は摩利支天（摩利支尊天）である、との見解が一般的のようである。また、祭礼日を摩利支天の縁日、としていたのは猿江のみであつた。摩利支天の祭とされる亥の日との関連も現在は見られない。現在はそれぞれ土地に鎮座する一鎮守であり、伝承や残された像、記録などで摩利支天の残像をみるのみとなっている。

また、この三社に本社末社関係は認められないし、祭祀者の家にも関連はなさそうである。いずれかの勧請を主張するものもない。また江戸における摩利支天は火災避けや盗難防止などを、右叡の日先神社は疫病避けなど、といった異なった利益を主張していた。ただし、正確な年代は定かではないが右叡の日先神社の奉納額のひとつに、「東京市深川区西元町」（明治十一年、昭和二十二年の行政区画）の住所を記した鰻屋からのものがある。ゆえに、信仰者の中で、近代以降何らかのつながりがあつた可能性もあるが、詳細は不明である。

また現祭神はすべて異なる。そのうち右叡の日先神

c社の周辺地域は鹿島・香取信仰の影響が強く右禊に鎮座するもう一社の旧村社は鹿島神社であり、周辺の村々にも鹿島・香取を祀る神社は多い。さらに明治十五年の由緒では、天孫降臨に際して、祭神の三神が天下を平定したという説を紹介し、太陽を象徴する天照大神に先立った神々であったことを暗示している。神山の日先神社は前述のように管理者による「天照大神が神道でもっとも偉い神である」という解釈にもとづく。猿江の日先神社は近世後期には日前宮の祭神（天照大神）とされていたこともあったが明治以降、猿田

図1 「日先」神社の特徴一覧

鎮座地	現祭神	旧社格	前祭神	摩利支天の姿	「日先」の理由	信仰圏	伝承の創建年代
江東区猿江	猿田彦大神	無格社	摩利支天（ 時天照大神）	多臂の像を二臂に直した像（現在失）	紀州日前宮の分社・摩利支天が太陽の前に立つため	東京近郊	近世中期
大洗町神山	天照大神	無格社	摩利支天	猪に乗った摩利支天	摩利支天が日の先に立つ神であるため	旧常陸守山藩士	幕末
土浦市右柳	武甕槌命 経津主命 衝立船戸神	村社	摩利支天	双体の天狗猪に乗った摩利支天	地名「日先峰」より	関東一帯、東北地方など	平安後期

彦になった。猿田彦は天孫を先導した神として著名であるがゆえ、摩利支天が日の先を行く神という伝承に合致した可能性もある。

また、三社ともに、社殿の焼失、代々の社家の断絶、氏子の変化など祭祀者、伝承になんらかの断絶がある。そして日先をめぐる由来、信仰の形態もまったく異なり、神社に対する共通する利益や伝承をみることはできない。

三 摩利支天と「日先」

(一) 仏典による摩利支天の解釈

これまでみてきたように、「日先」神社は摩利支天と関連していたが、近代以降神道祭祀となり、各所で独自の伝承を展開してきたと考えられる。しかし「摩利支天が日（太陽）の先に立つ神である」という知識が神山、猿江には伝わっていた。この知識は何をもとにしたものであるかが問題である。そこで本章では近世から近代にかけて流布したと思われる、摩利支天に関する経典と、近世期摩利支天について概説した記録を分析する。さらにそれらを各地に伝えることにもかわった可能性のある近世神道や法華宗（日蓮宗）などについても若干分析し「日先」と社名がつけられるに至った思想的背景を考察したい。

「日先」の語は、各神社がかつて祭神（本尊）としていた摩利支天とかかわりがある。仏典の上ではおもに「日前」と記され、摩利支天を象徴する言葉である。

『仏説摩利支天菩薩陀羅尼經』では摩利支天について以下のように説明されている。

爾時世尊告諸比丘。日前有天。名摩利支。有大神通自在之法。常行日前。日不見彼。彼能見日。無人能見。無人能知。無人能捉。無人能害。無人能欺誑。無人能縛。無人能償其財物。無人能罰。不畏怨家能得其便¹⁰。

（訳）爾の時世尊は諸比丘に告ぐ。日の前に天有り。摩利支と名づく。大神通自在の法有り。常に日の前を行き、日は彼を見ざるも彼は能く日を見る。人の能く見るなく、人の能く知るなく、人の能く捉うるなく、人の能く害するなく、人の能く欺誑するなく、人の能く縛するなく、人の能く其の財物を償するなく、人の能く罰するなく、怨家も能く其の便を得るを畏れず。

そのほかにも『末利支提婆華鬘經』に「有天名末利支。常在日前行」¹¹、『佛説摩利支天經』に「有天女名摩利支。常行日月天前」¹²、『佛説摩利支天陀羅尼呪經』に「有天名摩利支天。常行日月前」¹³、『佛説大摩里支菩薩經卷第一』にも「有一菩薩名摩利支。而彼菩薩恒

行日月之前^①』としてゐる。摩利支天に關するさまじまな經典によつて、陽炎の化身とされ、様相は天女、三面六臂で猪に乗つた憤怒像などさまじまな形容をとつてゐるが、共通して「日の前に行く」「常に日天、月天の前に行く」存在と説かれてゐるのがわかる。

そしてこれらの經典を直接知らずとも、摩利支天^②日前という解釈は、近世期に事典やさまざま書物によつて広く流布されていたようであり、知識人の間では自明のことであつたと思われる。

中世に編纂された事典『節用集』を元禄十一年(二六九八)に再編した『書言字考節用集』には

摩利支天 名義集、此云陽炎在日前行義楚其天女所執一扇上有萬字及日月形一上有火焰摩利支天常居日前執也^③

とある。安永六年(二七七七)〜明治二十年(二八八七)にかけて編纂された事典、『倭訓栞』にも

摩利支天と書り、呪三首經にあり、軍神とす、摩利

支此翻陽炎此天通行日月之前不可見、不可捉、火不能燒、水不漂如陽炎也、雖諸怖畏能令人於水火盜賊怨敵軍陣皆可院月^④

「日の前に行く」との説明がなされている。

これらは經典の知識を解説したもので、このほかに『節用集』が参照文献としてゐる『名義集』、『義楚』、そのほか『真俗佛事編』などの事典類その他多くの文献に記されており、經典からの釈義が流布し、参照、引用、伝承が簡単であつたことがわかるのである。

(二) 近世神道者の摩利支天解釈

摩利支天の「日先」解釈が仏典を典拠としているならば、本来は「日前」と称する必要性があると思われるが何故に「日先」と記されるのであろうか。

仏神である摩利支天を神道の思想で日前(日先)神とした解釈は、判明するものでは天明七年(二七八七)に出版された森島中良の『紅毛雜話』がもっとも古い。

『紅毛雜話』は、森島の兄である桂川国瑞(甫周、文面では家兄、伯氏等と記される)が毎年春に参府のた

め江戸に來たオランダ人から聞きただした種々の話を記録しておいたものを、森島が編集したものである。伯氏（桂川）による、仏神の摩利支天をオランダ語のマルス（火星）と同義とする説の中で、摩利支天を祀る寺社を指定してはいないが、日本に「日前の神」^{ひのさき} 摩利支天という近世神道者の解釈が存在していたことを以下の様に紹介している。

摩利支天 火星 熒惑星なり を紅毛にて「マルス」といふ。「ウワールブック」に日の前立て廻る星、軍神なりと註せり、摩利支天是れなるべしと家兄の説なり中良案ずるに翻訳名義集は摩利支此は陽炎といふ、日前^{ひのさき}に在りて行ると註したり、また、神学者流、摩利支天をさして日前^{ひのさき}の神といふよし伝聞せり、かたがたをあわせ見るに、伯氏の考必せり^{なり}。

吉田神道や白川神道などの近世の神道思想による祭神の解釈は寺社の祭式、信仰、祭神などにさまざまな影響を与えていたらしく、『紅毛雑話』¹¹ 載録の解釈もこうしたもののひとつであったのだろうか。

近世後期に猿江摩利支天祠（現日先神社）を管理していた神道者、吉田兵庫は白川神道（伯家神道）の影響下にあったことが前述の『葛西志』¹² によってもわかる。近世期、吉田神道と並び称された白川神道の影響を受けた民間の神道者は多く、神社祭祀にも大きく影響を与えた¹³。摩利支天を「日先」社と改称させた背景には白川神道の解釈が関係しているとも考えられる。神道者と思われる吉田兵庫と猿江摩利支天について、国学者齋藤彦磨は弘化四年（一八四七）に著した見聞録、『神代余波』¹⁴ で、多臂であった摩利支天像の手を落とし二本の手の神像として祀り、摩利支天でなく紀州の日前宮の末社であることを主張し、祭神を天照大神と改変しているさまを以下の様に考察している。

本所猿江摩利支天は、佛鉢にて、背に手あまたありて、弓矢、劍鉞など持ちたる像にて、修験者安置したるを、後に神職の持となりて、手は左右二本残して、外は皆取払ひ日先大神宮と号し、紀伊國名草郡日前天照大神と同神也といへり、摩利支天は陽炎ともいひて、日の前にあるよし、名義集にも義楚にも

あれど、紀伊國のとは異也、これは日前ヒノクマかれは日前ヒノスヘ、字は同じけれど異也

(頭書) 摩利支天の神主吉田兵庫総義は、船橋御殿なる當上総介直利朝臣の門人にて、我孫弟子なり^①

しかし、齋藤彦磨が指摘するように、摩利支天を日先とするのは摩利支天経による影響が大きい。さらに齋藤の見聞当時、神道者吉田兵庫が「当社は紀伊國の日前國縣宮の分社である」と称していることを批判し、『名義集』、『義楚』などを引用しながら摩利支天の解釈を行い、紀伊の日前宮と区別している^②。また、頭書にあるように齋藤と吉田は同門であり、国学者、神道者としての齋藤の解釈が主張され、現在もこの解釈が踏襲されている。

また日前(和歌山)、日御碕(島根)といった社名を持つ神社を各地に見ることができ、摩利支天との関連を見ることはできない。「日前神」は『日本書紀』に登場する神名で、現在でも和歌山県の日前國縣宮の祭神である。しかし摩利支天経との関連は何われず、まったく別の神と考えられている。經典には「日

前」とあるものをあえて「日先」としたのは、摩利支天を神祇化するにあたって、日前國縣宮との混同を避けるためであったかもしれない。

(三) 法華宗の摩利支天解釈

「日先」の解釈が白川神道の影響であるにしても、近世、摩利支天信仰を広めたもののひとつは法華宗(日蓮宗)であった。法華宗が近世の摩利支天信仰に強い影響力があったとすれば、「日先」神社もまたその影響を受けていると思われる^③。ゆえに本節では「日先」に限らず近世の摩利支天信仰史を把握するためにも、法華宗と摩利支天の関係にもふれておきたい。法華宗が摩利支天について言及するのは古く、弘安二年(一二七九)の身延山からの書状、『四条金吾殿御返事』では、法華経の行者を諸天神、殊に摩利支天が守護する、と説いているという^④。法華経を聖典とする法華宗にとって摩利支天は重要な仏神であったことがわかる。もちろん、近世の法華宗寺院は、開祖日蓮を信仰する祖師信仰、それ以外では鬼子母神信仰の数が抜きん出ており、摩利支天はそれらほど多くはな

い。しかし江戸の法華宗寺院で摩利支天を開帳しているものはいくつか見られるし、祖師像や鬼子母神像とともに摩利支天像を所蔵する寺院も多くあったようである。

江戸時代から現在にいたるまで、もつとも有名な摩利支天のひとつは長沢利明の指摘する上野御徒町の徳大寺である¹¹⁾。本尊は猪に乗った摩利支天像であり、武神として力士の参詣を受けたり、盗難避け、火災避け等さまざまな利益を持ち、アメ横に位置するこの摩利支天は現在でも大いに賑わいを見せている。

もうひとつは雑司が谷玄浄院であり、鬼子母神信仰で有名な法明寺の支院であった。弓矢の上達を祈願することが多かったようである。猿江の摩利支天、御徒町の徳大寺、そしてこの玄浄院は『東都歳時記』に載る江戸の代表的な摩利支天であった。この二寺はともに法華宗寺院である。さらに近世に行われた摩利支天の開帳の大半は法華宗寺院であったようである。

摩利支天の経典では「日前」と記されているものが、法華宗寺院の摩利支天解釈で「日先」となっているものも存在する。それは江東区猿江の日先神社の至近距

離、深川猿江にあった法華宗、慈眼寺境内の鎮守、摩利支天社である。

現在は存在しない摩利支天社の由緒は、『新編武蔵国風土記稿』に続く地誌として編纂された『御府内風土記』のさらに続編として、文化年間に江戸幕府が府内の神社をまとめた『御府内神社備考』に記されている。この由緒は宝暦九年（一七五九）に日東という僧によつて記されたとされる。創建の由来は阿部仲磨が唐で信仰した摩利支天像が、佐渡で日蓮とめぐり会い、最終的に当寺にいたるといった内容である。その中に摩利支天についての解釈が以下のように記されている。

摩利支尊天は常に日天王の先に立させ給ふ一日一夜に四天下を廻り四州の衆を守らせ給ふ尊天なりそもそも我国は唐より日のもとと称し殊さら惣廟を天照神と号し奉る志かれハ四天下の利益平等なりといへとも日の先の尊天を日のもととくに鎮座し奉らハし別して神慮にもかなひ且ハ国恩を報するにたらんとて終に本朝に渡すとかや¹²⁾

近世、寺町であった猿江には多くの寺社が集結していた。日先社の近隣にあった慈眼寺の摩利支天も、摩利支天の説明として猿江摩利支天祠と同様に「日前」でなく「日の先」と記されていることがわかる。

慈眼寺は明治四十五年（一九一二）に菓鴨に移転しており、やはり何度か焼失し、現在摩利支天社を祀ってはいないようである^{〔註〕}。

江戸に限らず、京都市堀川にあり、中世史上、鍋冠上人として有名な、日親上人を開基とする本法寺の境内には日親上人が夢想して得たものとされている摩利支天を祀る社、鬼子母神を祀る社^{〔註〕}があり、摩利支天が乗るとされる猪を狛犬に見立て、「摩利支尊天」の名で多くの提灯が奉納されている。

さらに茨城県内の「日先」神社周辺にも法華宗の影響が伺える。土浦市の右粉には法華宗では重要な位置を占める鬼子母神が「右粉村絵図」に記載されている。それは日先神社（摩利支天権現）からは離れた右粉の中心部に現存している。さらに村内には別地域からの移転とされるが南無妙法蓮華經と彫った石塔などが建立されている。大洗町神山周辺でも、墓地などは日蓮

宗系統のものが多く見られた。

四 おわりに

これまでみてきたように「日先」という、経典の釈義と思われる言葉は、神社制度の中で社名として各地に伝承されている。しかし小稿のねらいは「日先」の原義（と筆者が推測したもの）の指摘ではなく、それとは関連せずに、各地の「日先」神社が社名の由来や歴史、信仰などに独自の伝承を展開していることの確認にある。それらは、「地名にもとづく」、「仏典の解釈から」、といった各地各人による解釈の結果といえるだろう。

また「日先」の釈義について、現地では不明確なことを文献、現地調査から以上のような釈義を推察できることもまた事実である。しかし、筆者の推測した原義と各地の伝承を比較し、摩利支天信仰の残存を推定することはできるが、そうした分析もまた筆者による伝承の解釈のひとつにすぎない。神道者や研究者による捏造として否定されてしまう可能性もある伝承も、

真偽判定の材料ではなく、それぞれを、解釈され、創造された伝承としてとらえる必要があるのではないだろうか。もちろん近世、近代に発生したと思われる伝承も、さまざまな変遷を経ており、明確に把握することが困難である。これらをかざる形で現地に紹介するかもまた、解釈者の視点によるのである。

神社の伝承に関しては「日先」に限らず、稲荷、八幡など、各地に共通の社名を持つ神社について事例を集め、各信仰、伝承の原型を再構成しようとする試みがこれまでも多く行われてきた^①。しかし、同名でありながら、本社末社関係が明確でなく、信仰の形態、由緒などが異なり、土地ごとに独自の発展を遂げている神社にまつわる伝承はあまり注目されず、原型を探るためには unnecessary 部分として排除されてきたように思われる。

また、仏神が神仏分離によって神道祭祀となった例も摩利支天に限らない。弁天が厳島神社と、大日如来が日元大神と改称する^②等、近代以降の神社祭祀の変化によって伝承や信仰がいかに変化してきたかについても注目すべきであろう。

そして、小稿であつかった「日先」神社についての考察自体は、筆者の把握した関東地方近郊という狭い範囲におけるものであり、全国各地の摩利支天あるいは「日先」解釈の分析とは程遠い。摩利支天信仰はほかに摩利支天社や摩利支天堂といった祠堂^③、「摩利支天」と彫った石仏などが各地に分布する。さらに、江戸の永代寺（真言宗）、泉岳寺（曹洞宗）、京都府建仁寺や山梨県山梨郡栖雲寺（臨濟宗）の摩利支天^④など、神道や法華宗に関連しない摩利支天も存在する。

これらについての把握も今後の課題として残っている。最後に小稿をなすにいたった、記述された民俗資料の利用法について若干私見を述べておきたい。重出立証法などに代表される、広範に事例を比較検討する研究方法は重要である。それとは逆に各地域の事象を重要視し、分析する個別分析法もまた、現地調査と文献調査の結果を研究者、報告者は民俗資料として記述する。その意味で今日現地の民俗の把握を試みた神社誌、民俗誌、調査報告書などは、広範な分析にも地域理解のためにも重要な資料となる。しかし一地域、一事例の主張する伝承は一定不変のものではなく、さまざま

な変化を経ている。さらに仏教や神道の教理や、伝説、年中行事、民具、語彙等はその地域のみならず、文献資料や他地域との比較のなかで理解できることでもある⁽¹⁾。

調査地において把握された事例をいかなる解釈のもとに記述するかは、研究者、記述者の視点に左右される事柄であろう。伝承は採集時期や採集者によってもその質を異にする。それらのどれを選択し、いかに表現するかといった資料の検討が必要であることを実感する。口承書承にかかわらず、ひとつの対象について民俗資料が複数存在する場合、伝承の更なる把握と利用にはそれらについての文献、現地による総合的な調査と調査者の明確な視点が不可欠であり、同時に各地独自の伝承をも尊重した分析を行うべきであろう。

《付記》

小稿は日本民俗学会第五十三回年回（於帝塚山大学）における口頭発表「『日先』神社をめぐる伝承——摩利支天から神社へ——」の内容を加筆、修正してまとめたものである。発表にあたっては桜井徳太郎先生をは

じめ、多くの方々に貴重なコメントをいただいた。調査にあたっては、土浦市右柳日先神社宮司・宮本昭氏、大洗町神山日先神社宮司・吉田堯氏には、突然の訪問にもかかわらず調査にご協力いただいた上、貴重な資料を提供していただいた。また資料収集にあたり茨城民俗学会の徳原聡行氏からも助言および資料を提示していただいた。この場を借りて御礼申し上げます。

《註》

(1) 拙稿「神社由緒の変遷と伝説・歴史——土浦市右柳日先神社を事例として」(『史潮』新四九号 二〇〇一年)

(2) 長沢利明「玄猪と摩利支天——東京都台東区上野徳大寺」(『西郊民俗』第一四七号 一九九四年) 後に「玄猪と摩利支天——台東区徳大寺——」として長沢利明「江戸東京の年中行事」(一九九九年 三弥井書店)に載録。

(3) 平成十三年四月、日先神社宮司宅に送られてきた書簡より引用。陸前高田市では現在でも日先神社祭礼を行い、そのさい掛軸を広げている。しかし右柳への代参などが行われていたわけではなく、信奉者は右柳の日

先神社を最近再発見し、掛軸や信仰を紹介するこの書簡を送り本社が右初であることを再確認した。

- (4) 『神社明細帳』(国文学研究資料館史料館蔵 文部省調査局宗務課引継文書 大正二(一九一三)年改定)でも日先神社の鎮座地を「茨城縣管下常陸國信太郡右初村字日先峯」と記している。(右初は後に新治郡となるため、後に町村名は修正されている)なお「由緒」の項目には「不詳」とある。
- (5) 右初の日先神社由緒の詳細については、拙稿「神社由緒の変遷と伝説・歴史——土浦市右初 日先神社を事例として」を参照されたい。
- (6) 矢口豊村『東村誌』(一九三四年 茨光社) 三六頁。
- (7) 土浦市教育委員会編『土浦市史 民俗編』(一九八〇年) 二〇三頁。
- (8) たとえば『角川地名大事典』8 茨城県(一九八三年 角川書店)で周辺の小字を確認してみると、右初には、日光峰、日光神社、日光神社境内等の小字が存在する。いずれも「日先」ではなく「日光」の記述になっているが、「ヒノサキ」と仮名がふつてある。
- (9) 一点(写真3)は「奉獻 明治參拾三年一月辰日 東茨城郡下中妻村大字中原 瀧田」もう一点は奉納年不詳。ちなみに明治三十三年は子年であり亥年の翌年。
- (10) 実際に藩祖の墓とされるものは現在福島県にある。
- (11) 茨城県神職会編『茨城県神社誌』(一九四〇年) 二七一頁。
- (12) 茨城県神社庁編『茨城県神社誌』(一九七三年) 八四五頁
- (13) 昭和十二年版『夏海小学校編夏海郷土読本』の引用(大洗町史編纂委員会編『大洗町史』通史編 一九八六年) 四〇七頁参照。
- (14) 『大洗町史』通史編 四九二頁。
- (15) その中には明治年間の亥年に奉納された和歌を詠んだ額が残る。
- (16) かつて山形県から熱心な崇敬者が何度も参拝しに来ていたというが、平成十三年現在には来ていないという。
- (17) 『神社明細帳』(文部省調査局宗務課引継文書 大正二年改定)では由緒に「正徳年中勧請ス」とあり、『葛西志』では延享の頃の勧請とする。
- (18) 三島政行『葛西志』(一九七一年 国書刊行会 東京 地誌史料)なお、『新編武蔵国風土記稿』に猿江の摩利支天についての記述はない。
- (19) 市古夏生・鈴木健一校訂『新訂江戸名所図会』6(一九九七年 筑摩学芸文庫) 七一頁。
- (20) 朝倉治彦校注『東都歳時記』1(一九七〇年 平凡社

- 東洋文庫(一五九) 四八頁。
- (21) 朝倉治彦校注『東都歳時記』 1 二三—三五頁。
- (22) 朝倉治彦校注『東都歳時記』 2 (一九七〇年) 平凡社
東洋文庫(一七七) 一一—八頁。
- (23) 朝倉治彦校注『東都歳時記』 3 (一九七二年) 平凡社
東洋文庫(三二一) 四頁。
- (24) 金子光晴校訂『武江年表』 2 (一八〇四年刊) 一九六
八年復刊 平凡社東洋文庫(一八) 一一—四頁。
- (25) 西山松之助「齊藤月岑日記抄録」(『東京教育大学文
学部 史学研究』七一号 一九六九年) 四四頁。齊藤
月岑の日記には江戸各所の寺社に参拝した記事があり、
そのうちのひとつ。嘉永七年十月八日、また明治元年
正月には下谷徳大寺の摩利支天に参拝していることが
わかる。西山松之助「齊藤月岑日記の明治」(『史潮』
一〇六号 一九六九年) もあわせて参照。
- (26) 比留間尚「江戸開帳年表」(西山松之助編『江戸町人
の研究』第二卷 一九七三年 吉川弘文館) 参照。
- (27) 近代日本地誌叢書 東京編②『東京名勝圖會 東京名
勝獨案内』(一九九二年復刊 龍溪書舎) 参照(頁数
記載なし)。
- (28) 近代日本地誌叢書 東京編②『東京地理沿革誌』(一
九九二年復刊 龍溪書舎) 四七一頁。
- (29) 『東京都神社名鑑』上巻(一九八六年 東京都神社庁)
三八一頁。なお、『江東区史』(一九五七年) 一六三—
一六三三頁にも同内容の記述がある。
- (30) 深川區史編纂會編『深川區史』(一九二六年) 序文参
照。大正十二年六月二十三—二十四日、深川區明治小
学校で行われた「深川史料展覽會」に出品された史料
の目録が掲載されている。同年九月関東大震災が起こ
り深川は焦土となり、その際これらの史料は失われた
という。
- (31) 『語りつくす町の歴史 猿江の戦前・戦後』(一九九四
年 猿江の戦前・戦後を語る會) 十頁。
- (32) 大興寺三藏沙門不空奉 詔訳『仏說摩利支天菩薩陀羅
尼經』(『大正新修大藏經』第二二卷 密教部四 大
正一切経刊行會) 二五九頁。
- (33) 『大正新修大藏經』第二二卷 密教部四(一九二八年)
二五五頁。
- (34) 『大正新修大藏經』第二二卷 密教部四 二六〇頁。
- (35) 『大正新修大藏經』第二二卷 密教部四 二六一頁。
- (36) 『大正新修大藏經』第二二卷 密教部四 二六二頁。
- (37) 中田祝夫、小林祥次郎『書言字考節用集 研究並に索
引 影印編』(一九七三年 風間書房) 一—三頁。な
おこれ以前に編纂された『節用集』には「摩利支天」

の項目自体存在しない。

- (38) 『増補語林 倭訓栞』下巻(一八九八年 皇典講究所)
- (39) 森島中良『紅毛雑話』(一九八〇年 恒和出版 江戸科学古典叢書三一)一九〇頁。
- (40) 一例をあげれば、吉田神道とそれに強い影響を受けていた、古今伝授をとまなう歌学による解釈により、近世以降「下野国(栃木県)の宇都宮二荒山神社(示現神社)の祭神が柿本人麻呂である」という説が流布した形跡がある。詳細は拙稿「栃木県における柿本人麻呂解釈の展開 —宇都宮大明神と人丸神社—」(『常民文化』二四号 二〇〇一年)を参照されたい。
- (41) 井上智勝「神道者」(高埜利彦編『民間に生きる宗教者』二〇〇〇年 吉川弘文館)を参照。
- (42) 斎藤彦磨『神代余波』(弘化四年)、『燕石十種』第三巻 一九七九年 中央公論社)一一九頁。
- (43) 斎藤彦磨が摩利支天の釈義について参照している文献は、『節用集』が摩利支天解釈に用いている参照文献とまったく同じであることは興味深い。
- (44) 比留間尚「江戸開帳年表」によれば、嘉永四年の猿江摩利支天の宗派として「日蓮宗」と記している。年表の典故として明記されている二種の史料のうち、斎藤月岑による『武江年表』には猿江の宗派は記されてい

ないので国会図書館蔵 旧幕引継文書のうちの「開帳差免帳」に記されているかと思われる。ただし「江戸開帳年表を分析した比留間尚の「江戸の開帳」(西山松之助編『江戸町人の研究』第二巻 一九七三年 吉川弘文館)三五一頁の「方面別居開帳寺社一覽」では猿江摩利支天の宗派の項目は空欄である。

- (45) 『日蓮宗事典』(一九八一年 日蓮宗事務院)一六〇頁。

(46) 長沢利明「玄猪と摩利支天 —東京都台東区上野徳大寺」などを参照。

- (47) 「江東区社寺資料」(『江東区年表』一九六九年 江東区役所)五一三頁。また活字でない原文を採録した『御府内寺社備考』六巻(一九八七年 名著出版)三四七頁でも「日の前」でなく「日の先」である。なお『葛西志』二六三頁には以下の記述がある。

泉養寺の東に隣れり。法華宗にて、常陸國小山久昌寺の末なり、龍野山と號す。

摩利支天堂、客殿の東にあり。

ここからは、日先社とは別の社として慈眼寺の摩利支天社が存在したことがわかる。

(48) 東京都豊島区教育委員会生涯学習課文化財係編『豊島

区仏像彫刻調査報告書 豊島区の仏像』(二〇〇〇年) 八頁～九頁によれば、現在の慈眼寺に伝わる仏像は、木造日蓮上人坐像一体、木造鬼子母神立像二体、鉄造鬼子母神立像一体であるという。

(49) 宮崎英修編『鬼子母神信仰』(一九八五年 雄山閣) を参照。

(50) こうした問題意識のもとで、徳原聡行は茨城県、東北地方などに分布する「ホロワ」神社について分析している。また江本好一は神奈川県内に分布する「サバ」神社について分析を行っている。徳原聡行「ホロワという神様」(『茨城の民俗』二八号 一九八九年 茨城民俗学会) 江本好一『源義朝を祀る サバ神社 その謎にせまる』(二〇〇〇年 武田出版、などを参照。

(51) 茨城県新治郡田宮村(現新治村)、小山崎村(現土浦市)の大目塚は、明治二年に日元大神と改称しているという(徳原聡行の調査成果による)。

(52) 埼玉県飯能市大河原鎮座の旧村社軍太利神社の境内社には摩利支天社があり、負けず嫌いの神で勝負事や商売繁盛の願掛けのためにブリキの剣を奉納するのだという。埼玉県神社庁編『埼玉の神社 人間・北埼玉・秩父』(一九八六年) 三二〇頁参照。

(53) 比留間尚「江戸開帳年表」によれば、この寺は猿江摩

利支天と同年の七月に本所回向院で出開帳を行っている。なお開帳当時の摩利支天の由緒には日の前を行くといった解釈は、まったく存在しない。「開運摩利支天 勝軍不動尊略縁起式」(中野猛編『略縁起集成』第二巻 一九九六年 勉誠社 一七一頁～一七三頁) を参照。

(54) この視点のもと、筆者は茨城県内に残る源頼義・義家にまつわる神社由緒について、神社誌や郷土誌が編纂されることにその内容が再解釈され、内容自体が変化する可能性を、これらの文献比較をもとに指摘した。拙稿「神社由緒の伝説解釈 — 茨城県の源頼義・義家伝説の記述の変化を通して —」(一九九八年 『常民文化』二二号) を参照されたい。